

幼児のことばの発達と保育(二)



花 上 洋 代

II ことばの発達(つづき)

C 一歳から一歳十一カ月まで

まず言語理解面をみてみましょう。一歳の誕生日を迎えた赤ちゃんはわりあい物知りです。意味、使い方の解っている物がたくさんあります。使っている場面は見なくとも、鉛筆やブラシを見ただけでその使い方がわかりますし、パパが洋服に着がえてネクタイをしめていると外出することがわかって「バイバイ」をしたりしますし、状況を手がかりにすれば「おねえちゃんにあげなさい」などという簡単な指示を理解することもできます。

また物の名まえがいくつかわかり、「ワンワンどれ?」「でんきどれ?」「おめめは?」などと聞くとその物を指さします。このように目や鼻を顔の中から区別して認識し命名することができ

たり、ある場面状況を判断してそれにふさわしい行動ができることは類推能力が発達してきている証拠といえます。絵に表わされたものを理解することもできるようになり好きな絵本がでてきます。一人で絵本の絵をじっと見つめて楽しんでいれることもあります。「絵」という抽象化されたものを理解することは、犬を「ワンワン」、猫を「ニャーニャ」という「音」で表わしたもの(その物のもっている一つの属性をとり出して抽象化したもの)を理解することと同じような抽象的能力を必要とする行動であると思われれます。

一歳後期になると人への興味、物への興味はますます広がり、深まり、理解できる語の数は非常に勢いで増えていきます。今までワンワンで一括していたものも、イヌ、ネコ、ゾウ、ライオン、ウマ、キリンというように弁別でき、それぞれの名まえを聞いて

理解できるようになります。また「ワンワン」という犬のもつ属性の一つとちがい、犬とは全く関係のない「イヌ」という音で犬を表わすことが理解できるということは大きな進歩で、理解語いの増加とときを同じくすることは興味深いことです。この時期にはまた、話しかけられたり、絵本を読んでもらうことが非常に好きで、絵や状況を手がかりに文章を理解することもできるようになります。絵本を読んでもくれるのを楽しそうに聞いたり、「ニャーニャにもビスケットあげてごらん」と言うと、その指示がわかって行動します。そのうちに絵や状況の手がかりがなくなると「きょうは〇ちゃんバスに乗っておばちゃんのお家へ行ったね、それから……」などという簡単な筋のあるお話を聞いていられるようになります。

表現面はどうでしょうか。○歳後期にあらわれた模倣行動はこの時期になるとますます活発になり、まわりの人々の動作や声を意識的に模倣しようとしています。咳やくしゃみや歌、テレビ体操のまねまでします。この時期には発語器官の機能も、手足の動きも今までの活発な自己活動を通じて発達してきているので、わりあいお手本に近い模倣ができるようになっていきます。ですからまねをするとまわりからほめられ喜ばれるので、それを何度もくり返し行なうことになります。このように人への興味が模倣をさそい、その結果がますます人への愛着を増す方向へ作用するという

回路が生まれます。

ですからこの時期は、特に对人的な活動を通して理解力、表現力がのびていく時期といえましょう。家族の喜ぶ動作を何度もくり返したり、イナイイナイバーを口分からしてみたり、スプーンでお母さんの口に食べものを入れてあげたり、对人的な遊びが増えてきますし、おとなに助けを求める行動——お財布をあげたり絵を描くなどの自分ではできないことをおとなにしてみたら、何かの事物を指さし問いかけるようにおとなの方を見るなど——が盛んになります。この行動はまた「自己の目的を遂げる手段として他に援助を求める」という、自・他（目的物・救助者）の三者が分化してとらえられなければ表われ得ない行動であり、言語の道具的使用に関連する行動項目であると思われる。

また今述べたような对人的行動の中から数多くの模倣が生まれ一人遊び（自己活動）の中に模倣によって獲得されたものがくり返し再現されるようになります。遊びながらいかにも日本語らしい調子の発声をしていたり、以前に母親のことばの一部を模倣したものを何度もくり返し発音していることもあります。

また新たに憶えたことばをいろいろな場面で自発的に積極的に使うようになります。人に呼びかけ、要求し、感嘆の意を表わし、かけごえとして用いたりします。たとえばこのようなおしゃべりがおとなに無視されたり、能率よく通じなかったりしても、そ

のことばを使うこと自体が楽しいかのようになってしまうけんめいしゃべります。「言ってごらん」と言われなくとも自分からしゃべり、家族ならばときどき状況を手がかりにすれば子どもの話していることがわかるようになります。

表現語い数は一歳前期にはまだ少ないのですが、いろいろなものに一つの語を使うという特徴があります。四つ足のもの、毛のはえたものをワンワンで表わしたり、電燈も月もろうそくも暗い中で光るものはすべてデンキで表わしたり、髪の毛、あわ、髪やテープの風になびくようすまでシャンブーで表わしたりします。これは一歳後期に表現語が増えてくるに従い消えていきますが、発達の初期にこのような「物のもつ特徴」をとらえて命名するという行動がみられるのはもうすでに高度な抽象能力が育っている証拠といえましょう。

一歳後期に表現語い数が増えるのは、単語の模倣がみられるようになることから理由づけられます。今までのように会話全体の調子を模倣するだけでなく、連続的な音の流れの中から、意味をもつ単語だけを選択的に模倣するわけですが、この現象は大変興味深いことです。二歳に近くなると「オンモ・イク」のように二つの語を組みあわせて使うようになります。これはおとなのことばをそのまま模倣しているのではなく、今まで聞かされて来た言語の構文ルールを探りあて、それを応用して自分の表現したい

ことを表わしているのです。模倣というより創造活動といえましょう。模倣を母体として生まれた創造活動は、ことば以外の面でもみられます。一歳後期には、みだてる行動、つもりの行動が出て来ます。○歳後期に、母親への愛着感情が基になり母親の注意をひきたくて「わざとずる」「ふりをする」「みせかける」という行動が見られますが、これらが模倣行動・役割をとって動く行動のステップになっているのかもしれない。「みだてる行動」「つもりの行動」とは、「何でも自動車にみだてて押して歩く」とか、「人形やぬいぐるみを母親が赤ちゃんをかわいがるようにして扱う」とか、「ごちそうを作ったつもりで空のお茶わんをスプーンでかきまわして母に差し出す」などの行動です。二歳近くになると、両手をひろげて飛行機を表わし、両手を波うたせてチョウチョウを表わすという行動まで見られるようになります。これらは物の特質を把握し、自身の身体で創造的に表現した行為といえましょう。

以上述べて来ましたように、一歳時是对人的な活動を通して模倣、表象能力がのび、創造活動が芽生え、徐々に活発になってくる時期といえます。

D 二歳から二歳十一カ月まで

二歳児は非常に知りがりやでおしゃべりです。そしてちょっ

と気むずかしい芸術家でもあります。知りたいこと、やりたいことが頭の中にいっぱいあって、ついついおしゃべりになってしまふのです。

まず「知りがりや」ですからたたくさんの物の名まえを知っています。「赤」とか「あした」とか「上」とか「下」とか抽象的なことばも少しなら知っています。大好きなお母さんといっしょに絵本を見ながら絵の名を言ったり指したりすることが大好きですし、筋のあるお話を聞くことも大好きで何度もお母さんにせがみます。そして毎日「なあに?」「だれ?」「どうしたの?」と質問を連発して、お母さんをうるさがらせますが、このような活動を通して語い、知識がふえていくわけですが、一方質問応答の形式が身につくとき、コミュニケーションの有用な道具として言語を使うことができるようになります。二歳後期にはお母さん以外の人も応答ができ、簡単なテスト場面にも応じられるようになります。

一人遊びをしているときにはたえず何かしゃべっています。長いひとりごとを言い、まだ無意味なことばのくり返しはあります。が、「ババ・カイシャ・イッタ」などの三語文をしゃべることもあります。よく知られているものについては、ジドウシヤ、ネコ、キンギョ、ハト、などと正しい名まえを言うようになりますし、自分のことは「〇〇ちゃん」ではなく「ボク」・「アタシ」にな

り、目の前にないものの名まえもいえるようになります。二歳〇カ月から四歳〇カ月までのおしゃべり量の増加平均は六六パーセントであるという研究結果からもわかりますように、この時期の最大の特徴は「おしゃべりである」ということで、子どもはこの時期を通じて日本語表現の猛練習をしているのです。またこの頃には発語器官の機能もほぼ完成し、おとなと同じように食べたり飲んだりできるようになります。発音練習のための準備状態もとのついているといえましょう。

遊びも今までのように身体全体で表わすようなことだけではありません。はっきりとしたイメージがあり、そのイメージを創造的に表現しようとしています。まだまだ未熟ですが物を作り線を描こうとします。積み木を並べ汽車を作り、粘土や砂でお菓子を作ります。お友だちも今までのようにおとな——ときには助けを与えながら子どもにあわせて遊んでくれる人——だけではなく、同じように未熟で気まぐれな芸術家——同年齢の子どもとふざけっこをしたり、お互いにまねっこしていっしょに遊んだりします。

単語を並べ、文を作るという自発的な創造活動が始まると同時に、このような視覚—運動面の創造活動も始まります。そして、子どもを含めたまわりの人たちとの関係を深めていくことにより、自発性が伸び、この二つの創造活動——しゃべること、物を作ることも——も伸びていきます。

E 三歳〇カ月から三歳十一カ月まで

三歳児は自己主張をしながらいっしょうけんめい生きている一人の立派な人間であり、非常にタレントのある芸術家です。二歳児に比べると、頭の中にある人や物のイメージが豊富になり、確固たるものになります。創造活動の内容も高度になります。自分が消防車になって部屋中を駆けまわったり、テレビの主人公や動物のまねなどはますます迫力の富んだものになります。「こうでなくてはならない」というはっきりとしたイメージが、頭の中に生まれているでしょう。ままごとでの父、母の役割のとり方は、もう、さるまねではありません。確固とした父、母像があってそのイメージを遊びの間中、連続してもちつづけてふるまっています。またこまかい家庭的な活動をし、積み木や紙でままごとに必要なものを作って遊びます。今まで別個に行なわれてきたいくつかの遊びを関連づけて遊べるようになります。ままごと遊びの中に積み木遊びをとり入れたり、積み木やブロックでトンネルやホーム、家、門などを作り、自動車や電車と組みあわせて遊びます。描画もこの時期になるとただ描く、線を引くという活動ではなく人の顔など、「目的をもってある物を描く」という活動がみられますが、これもはっきりとしたイメージがあってそれを表現したい気持ちに基づ盤になっているのだと思います。

このようなイメージの強さ、豊かさはこの時期の子どもを「か

んこもの」であるかのように見せます。子どもは大好きなお話は何度でも聞きたがり、それも一言もまちがえずに話してもらいたがりますし、途切れそうになると続きをしつこく催促します。このような行動はまた、物事の時間的順序を記憶する能力が伸びてきていることとも、関連があるようです。表現面ではこの解釈をうら書きするように、過去、現在、未来を表わすことばが使えるようになったり、「お昼の時間」などのように時間ということばを使うようになりますし、短時間記憶力のびで、数を十まで唱えられたり、歌が一曲は歌えるようになりますし、絵本の文句（文章）を暗記することもできるようになります。

また、一般的な物の名まえはほとんど言えるようになります。文章の中には助詞が入ってきます。絵を手がかりにすれば筋のあるお話もできます。ままごと遊びの中でお母さんの役割をとりながら、お母さんらしくしゃべり家族を指揮することもできます。一人遊びのおしゃべりの中にも無意味なことばのくり返しがなくなり、経験したことについて「しだからししたの」というふうに短いけれど内容のつながっているお話ができるようになります。

F 四歳〇カ月から五歳十一カ月まで

三歳に比べるとこの時期は、表象能力が高度に分化した形で発展する時期といえます。描画や工作をみても、創作上の技能が上

達し、種類も多く、質も高くなります。紙、のり、はさみで立体的なものを作ったり、紙ヒコキを折ったり、経験したことがらを絵に表わしたりすることができます。ジャンケンのルールがわかるようになり、トランプゲームのやさしいものなどルールのある遊びに参加することができるようになります。数、曜日、月、文字などに興味を持ち、数字、文字が読み書きできるようになります。ことばそのものにも興味を持ち、反対ことば「た」のつく語などと言ってそれらを見つけることを喜び、意味のわからないことばが出てくると質問し「〇〇ってどういうこと？」と聞きます。しりとり遊び、などなぞなど、ことばだけしか使われないゲームもできるようになります。また、自分が考えていること、経験したことなど複雑な内容のことばで表わし伝えようとします。四歳のはじめの頃にはうまうまいかず、伝える方も伝えられる方もイライラすることがありますが、これも五歳になる頃には親しい人に気軽に気持ちで話す場合ならばうまうまと言えるようになります。発音のまがいもこの時期にはほとんどなくなります。

話しことばは、ある基礎能力の上に聴覚・音声回路を通じて学習することにより発達する自発的な活動です。ことばの発達の項では、同じ基礎能力の上になち、視覚・運動回路を通じて学習し発達してくる活動面の発達についても述べてきました。(この二つの活動面は鏡にうつった像、車軸についている両輪のようなもので

す。この両面の発達をみるにより話しことばの発達過程がより総合的にとらえられると思ひ、両面の関連性を述べながら書き進めて来ました。次号ではことばを育てるといふ面から特に自発性を伸ばすものに焦点をあてて考えてみたいと思ひます。前月号、今月号で述べましたことばの発達に関連する各種の面について、もう一度ふりかえっていただき、「私だったらこの時期にはこういうことをしてあげるのがよいと思う」といふ各自のお考えを用意していただけるとおもしろいと思ひます。(お茶の水女子大学)

参考文献

- ・津守・稲毛 乳幼児精神発達診断法(0歳〜3歳) 大日本図書 昭和36年
- ・津守・磯部 乳幼児精神発達診断法(3歳〜7歳) 大日本図書 昭和40年
- ・ケゼル他 乳幼児の心理学 家政教育出版社 昭和41年
- ・Mecham, M.J.: Verbal Language Development Scale American Guidance Service, Inc. 1958.
- ・中島誠 日本における言語発達研究の動向 心理学評論 Vol. 10 No. 2 1967
- ・Sei Nakajima: A Comparative Study of the Speech Developments of Japanese and American English in Childhood. (1)(2) Studia Phonologica
- ・赤ちゃんの発達 婦人の友社 昭和42年
- ・MacCarthy, D.: Language Development in Children in Leonard Carmichael: Manual of child Psychology. 1954